

平成30年度教員派遣スキルアップ研修実施報告書

報告職氏名 教諭 信太 さやか
臨時講師 虻川 麻依子

研修講座名・訪問校名・研修先住所等	研修日時
河合塾夏期講習授業見学および 講師との懇談 宮城県仙台市青葉区本町2	7月31日 9:00～18:50 計1日間、9時間
講師・担当者名	
木村健治（東北営業チーム） 岩見徳夫（社会科学系小論文講師） 中川靖之（生物講師）	
研修 の ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> ・予備校における受験対策指導を体験し、自らの教科指導力や受験対策の技術を高める。 ・2021年度入試に向けての河合塾での取り組みを知ること、学校の授業でできる方法や使える教材について研究する。 ・小論文指導の進め方を学び本校職員全体に還元することで、AO入試・推薦入試への指導に活かす。
研修 内 容 ・ 状 況 等	<p>① 9:00～10:30 高3・高卒生対象夏期講習「社会学系小論文」受講 初めの40分は、前日の講義で生徒が書いた小論文テーマについて、題意の解釈と参考資料の確認、小論文を書く手順について講師が解説を行い、また、4名の生徒の小論文を用いながら具体的な改善方法などを示した。</p> <p>② 10:30～12:00 小論文担当講師との懇談 小論文の指導について、どのような点を重視して評価をしているか、全体指導と個別指導ではそれぞれどのようなことを行っているか、などについて講師からのアドバイスを得た。</p> <p>③ 12:00～14:00 小論文採点担当者会議 今日の1コマ目で生徒が書いた小論文は、4名の採点者で分担して採点されていた。それに先立ち、講師の岩見先生を含め5名で、採点基準の統一のための会議を行った。 岩見先生による課題文の解説、評価される（得点になる）表現の確認、評価の観点と配点の確認、実際に生徒が書いた小論文数名分を4名の採点者と一緒に採点をし、評価にばらつきがないか確かめる、という流れで行われた。</p> <p>④ 14:00～15:00 生物担当講師との懇談 生物担当の中川先生から、大学入試共通テストへの対策や、アクティブ・ラーニング(AL)の予備校での実施状況についてお話を伺った。 また、中川先生がAL型授業のために研究されている教材を拝見させていただき、実際の授業の展開や、生徒の反応などについても伺った。</p> <p>⑤ 17:00～18:30 高3・高卒生対象夏期講習「総合生物」受講 中川先生の講義を受講。テキストに従い、「遺伝子の発現」分野の問題3題の解説が行われた。90分での講義で収めるため、基本用語に関する問いには触れず、実験考察問題にのみ触れていた。</p>

成果と課題

①・②

小論文を書く際に、まずは構成メモを作成することが重要であるが、本校ではその構成メモの詳細な作り方や流れのつかみ方などを指導する時間が十分ではないと感じている。岩見先生も、最後は個別指導、とおっしゃっていたが、ある程度の基本的技術の指導を、一斉に行うことができれば、現在のAO・推薦入試指導における小論文添削の質をもっと高めることができるのではないかとと思う。

また、例として挙げられた小論文のうち、ある生徒の書いた文は非常に論理的で、言葉遣いも巧みであったが、岩見先生からの評価は低かった。岩見先生は「小論文は『証明文』であり、事実や体験を挙げて”分析”されていなければならない」ため、論理性に優れていても事実が記述されていないものは評価しないとおっしゃっていた（事実を述べずに論理を”こねる”だけの小論文を高評価にすると、やがて自分の思い込みだけで文章を書くようになってしまうため）。

事実や体験といっても、これまでに高校生が経験し、知ることができる事柄はそれほど多くはない。この日の講義の残り50分では、新たなテーマで小論文を書いていたが、このときスマートフォンによる事実の検索可、であったことは、目から鱗、であった。

③

AO、推薦入試の小論文指導では、初めから個別指導になる。このような場面において、以前から「これは私の考えの押し付けになっていないだろうか」と、指導しながら疑問に感じることも多かった。今回の研修を経て、その疑問に対する解決方法を得たような気がする。

これまでは、小論文に述べる意見は多様で、1つの課題に対する意見も賛否さまざまであるため、「よく書けている」ことはあっても、明確にこれといった「正解」はないのではないかと考えていた。しかし、実際には課題文中、もしくは問いの文中に、すでに方向性の「正解」があるということがわかった。おそらく、入試の小論文を大学側が採点する場合にも、正解の方向性と、明確な採点基準、配点があらかじめ準備されていることと思う。その指導として客観的に小論文を採点するためには、生徒の小論文を読む前に、採点の基準を自分の中で整理しておくことが非常に重要であると感じた。

また、採点者が客観的に、明確に評価できるよう、小論文中に「事実」の記載があることが非常に重要であることが分かった。取り上げる「事実」に多少幼い印象があるものでも、それを高校生として客観的に分析することができていれば、高評価を得ることができる。ここは指導者として今後よく意識していきたいところである。

そして、本校のようにAO・推薦入試を受ける生徒の多い学校では、ある程度の一斉指導が必要なのではないかと感じた。例えば、3年生の6月からの補習等で小論文講座を数回設け、小論文の“型”を理解させるだけでも、個別指導がかなりスムーズになるのではないかとと思う。これは今後の進路指導において考えていきたい。

④

中川先生自身は、河合塾の講義を担当する傍ら、ある高校での授業も受け持っているということで、学校での現状もよく把握しておられた。また、AL型についても試行錯誤しながら進められているとのことだったので、その感触をうかがったところ、「AL型は、ある一定以上の学力をもつ生徒の場合は、学力向上に対する効果が高い。しかし、基礎学力のあまり高くない生徒の場合は、やり方によっては逆に成績が下がってしまう場合の方が多い」とおっしゃっていた。

現在は、医学部志望者のコースでAL型を実践されている。医学部志望者は基本事項がよく身につけているため、実験考察問題の演習をAL型を取り入れるととても盛り上がるそうだ。

また、そのときに大事なものは教材であると考え、研究をされているとのこと、その一つを見せていただいた。

本校の生徒の学力において、AL型が成績の向上に結びつくかどうかについて、日頃から疑問を感じていた。AL型ではグループワークなどが多く取り入れられ、

対話を通じた深い学びを求められるが、例えばジグソー法などの方法の場合、生徒ごとの取り組みへの熱意の差と理解力の差がより顕著になると感じる。

また、昨年の授業アンケートで「丁寧にわかりやすく説明してくれる先生の授業」の評価が高いという結果が得られていた。

先生からの説明は短時間で済ませて、授業の大部分は生徒同士の教え合いの時間、というのはAL型の理想ではあるかと思うが、ここ数年の経験や、中川先生のお話から、これは本校の生徒には合っていないと感じる。やや一方通行になってしまったとしても、説明は丁寧に言い、その振り返りの時間には効果的にAL型を取り入れる、という、本校に合ったAL型授業を今後も研究していく必要がある。

- ⑤ 講義の前に「今日は“ONE WAY”でいきます」とあらかじめお話しされていたとおり、演習問題の解説は、中川先生からの一方向での形式で行われていた。しかし、例えば実験の結果を考察する過程においては、初めから結論を述べるのではなく、思考の過程を重視した展開をしておられたため、考察しながら実際に感じる疑問点や、考察をある程度進めた結果、後から分かることが何なのか、などがとてもよく分かった。

そのため、講義中の先生と生徒の対話、生徒同士の教え合いなどの場面は一切なかったものの、講義終了後は多くの生徒が先生のところへ集まり質問するなど、積極的に学ぼうとしていた。

大学入試対策レベルでの学びにおいては、対話形式のAL型なのか、それとも多くの知識を一方向でどんどん与えられるのか、の違いよりも、いかにして生徒の知的好奇心、学びの意欲を呼び起こすかが重要であることを、今回感じることができた。

今後、自分自身の授業、放課後補習などの指導の場面において、それぞれの生徒の目標を明らかにしつつ、その場面に応じた工夫をしていきたい。そのために今回の研修は大変有意義なものとなった。

なお、今回の研修内容については、平成30年8月29日の職員会議で、職員全体に報告をした。